

岩瀬詩音

パレスチナ問題と日本の移民問題：「他者」の 社会的排除と受容

要旨

本研究は、パレスチナ問題と日本の移民問題という2つの問題の比較を通じて、文化的・民族的同質性が「他者」の社会的受容に影響を与えているという仮説に基づき、この2つの場面において「他者」の認識と社会的受容の違いがどのように形成され、影響を与えているのかを検討したものである。文脈の異なる立場の比較検証を行うため、本研究では①「他者」構築の主体、②「他者」の表象と機能、③排除と受容の形と境界の3つの比較軸を設定し、それぞれのアイデンティティ形成についての検証を行った。

両事例はいずれも、「他者」が権力関係の中で構築され、表象を通じて共同体のアイデンティティを形成・維持するという共通点を示した。一方で、パレスチナの場合は外的支配による暴力的他者化が、移民問題では内部規範による制度的他者化が中心であり、その差異は「排除のかたち」と「受容の限界」を明確に浮かび上がらせているといえる。

「他者」を通じて形成される社会的アイデンティティは、常に排除と受容の緊張関係の上に成り立っている。パレスチナの占領構造と日本の移民制度という異なる文脈を比較することで、「他者」は単なる排除の対象ではなく、社会が自らを理解し、再編する契機でもあることが示された。